

あおやましんめい

青山神明遺跡 (本発掘調査B)

所在地 西春日井郡豊山町青山神明地内
(北緯35度15分35秒 東経136度54分49秒)

調査理由 愛知県基幹的広域防災拠点整備事業および防災拠点
周辺道路整備工事

調査期間 令和7年5月～令和8年3月

調査面積 12,753㎡(10,181㎡+2,572㎡)

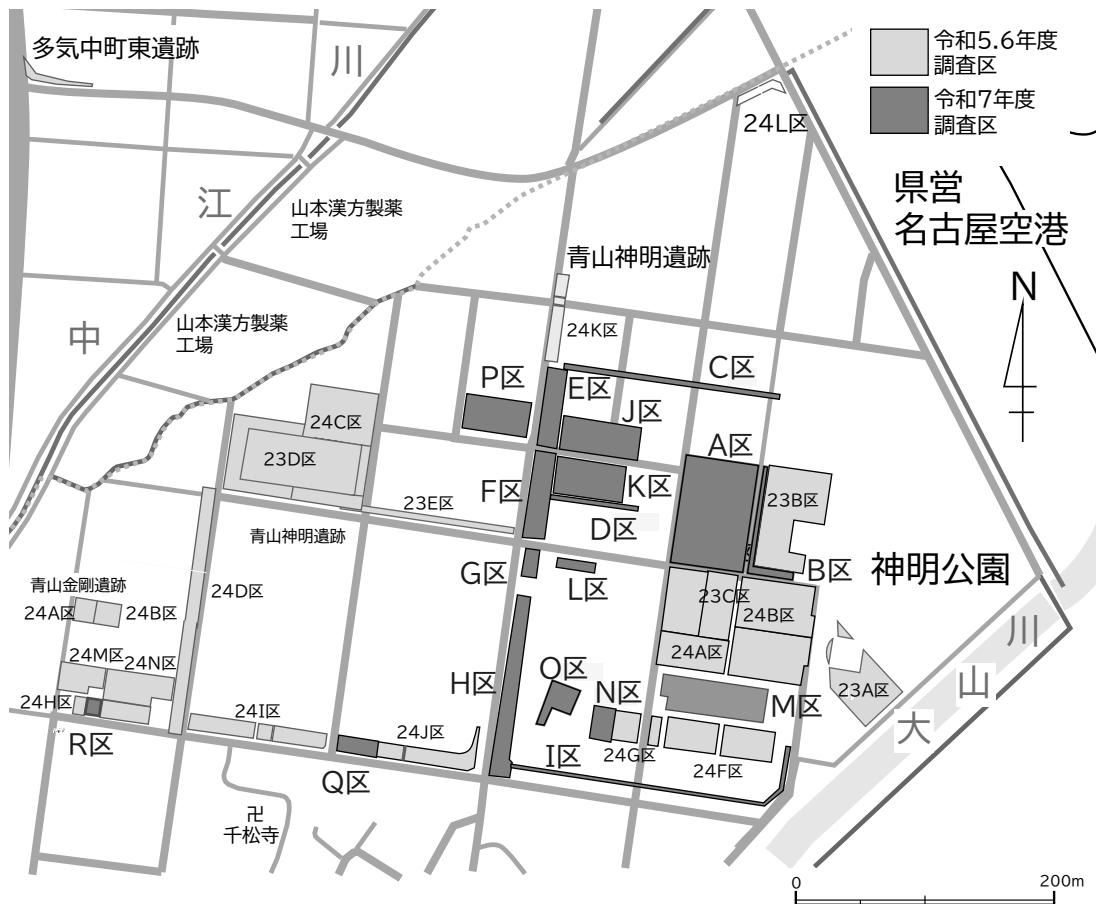
担当者 酒井俊彦・池本正明・鈴木正貴・中里伸明・
梶田真由



調査地点(1/2.5万「小牧」)

調査の経過 調査は、愛知県防災安全局による愛知県基幹的広域防災拠点整備事業と、愛知県建設局道路建設課による防災拠点周辺道路整備工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、令和7年5月から令和8年3月まで実施した。調査区はC区からP区までの14区あり、現地の状態に応じて調査区をさらに細分して調査を実施した。調査面積は12,753㎡である。こちらのうち防災安全局による事業の面積は、10,181㎡であり、道路建設課による事業面積は2,572㎡である、調査区のうちE, F, G, H区は両事業が隣接していることから調査成果については本稿でまとめて報告を行う。

立地と環境 青山神明遺跡は、西春日井郡豊山町の北部に位置しており、小牧市から続く低位段丘上に立地する。本遺跡の南東側には大山川、北西側には中江川があり、挟まれている。標高は約10mである。
(鈴木正貴)



令和7年度 青山神明遺跡調査区位置図

調査の概要 25C区は東西に細長い調査区で、柱穴が密集する西側と、溝が重複し井戸が分布する東側とで様相が異なる。西側では、古墳時代前期～中期の竪穴建物が1棟確認されたほか、土師器が出土する浅い土坑が散見された。また、L字に折れ曲がって25E区に続く中世の溝が確認できた。東側では中近世の溝が縦横に錯綜する他、古代の土坑・中世の井戸が確認された。

25D区・25K区 25D区およびK区は、柱穴等の分布密度が低く、溝や井戸が主要遺構となる。これは、微地形レベルで低地であることに加え、調査区西半分が大きく削平されていることに起因している。さらに調査区東側では遺構検出面から湧水層(非常に硬くしまった砂層)までの深さが数十cmと浅く、水気の多い土地条件であることが大きな特徴となっている。

25K区東側を中心に、風倒木痕が多数検出された。これは、非常に硬くしまった砂層までの深さが浅いことと相関しており、硬い砂層を突き破って根を張ることができずに横方向に広がっていった結果、強風等に抵抗する力が弱かったものと理解している。風倒木痕の埋土からは時期不明の土器極細片が稀に出土するものの、基本的に全ての遺構に切られている。よって、最も古い遺構(古墳時代前期末～中期初頭)よりは確実に古い時代に形成されたと判断できる。時代を決定する根拠に乏しいが、縄文時代に形成されていた植生が変化して低湿地化し、さらに弥生時代までに低位段丘化した状況が推定できる。

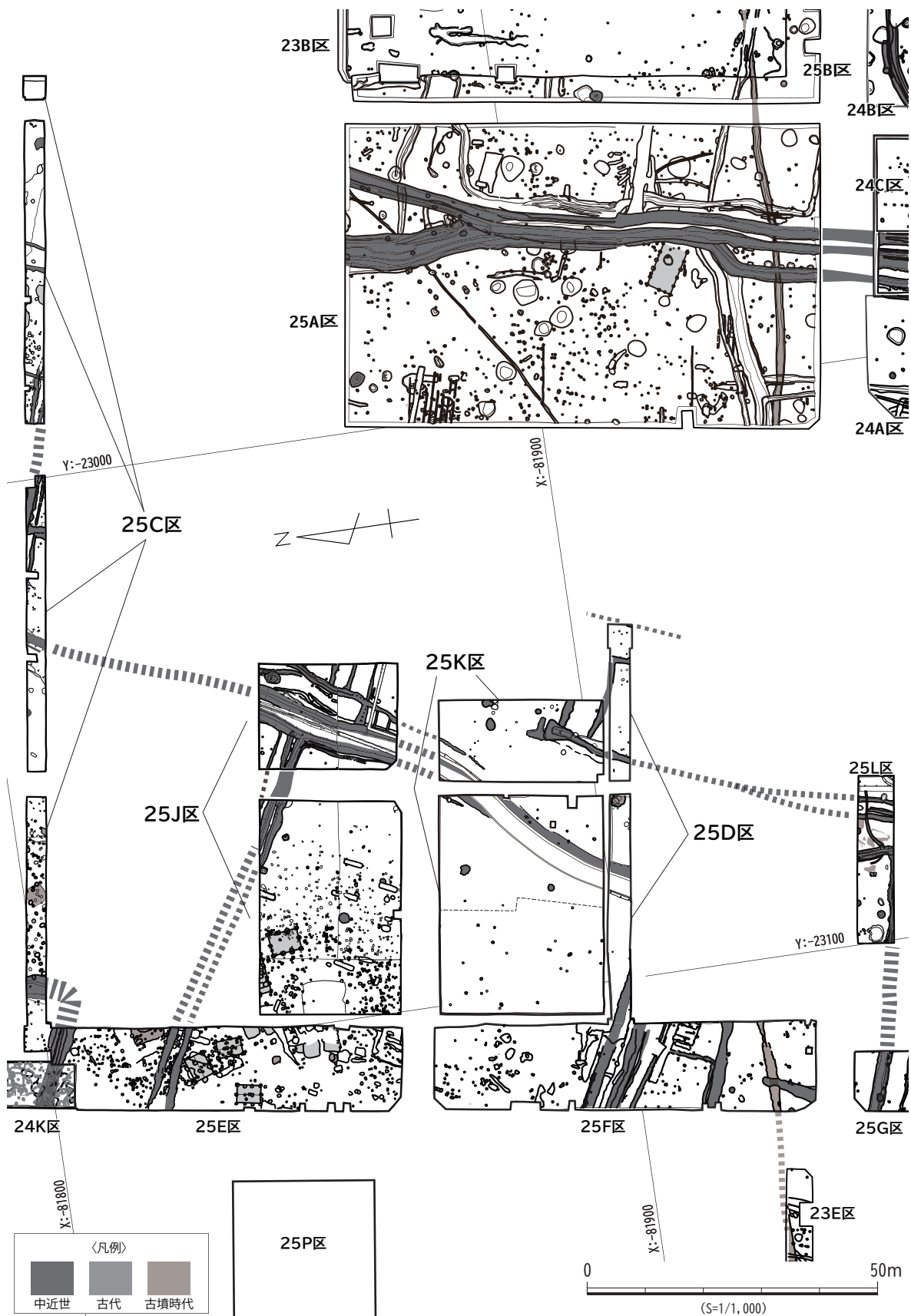
25D区では古墳時代前期末～中期初頭の井戸が1基確認された。出土した土器は相前後する時期のものがやや混在しており、25A区や25F区で検出された古墳時代の溝出土土器とよく似た構成となっている。井戸と溝が同時併存であった可能性は高い。

25K区では中世の井戸、中近世の溝が確認された。井戸は山茶碗がまともって出土するのが主体であり、そのうちの1基からは初期山茶碗・皿が完形で出土している。25K区東側では溝の起点が検出された。湧水層(非常に硬くしまった砂層)まで掘りこみ、その水を溝に流し込む構造となっている。灌漑用水路として機能していたのであろう。

25J区 25J区は柱穴等が密集する西側と、溝や井戸が分布する東側に大別できる。25J区西側では古代の掘立柱建物が確認された。ただし、柱穴自体から明確な遺物は出土していない。調査区西側に分布する遺物包含層に古代の遺物が目立つことと、柱穴の平面規模等からの推定にすぎないことは付言しておく。25J区東側で検出された溝はT字あるいはL字の平面形で、南北方向の溝に集束するのが特徴である。南北方向の溝を基幹水路、東西方向の溝が支水路として機能していたものと推定している。東西方向の支水路は近代までには埋まっていたとみられるが、南北方向の基幹水路は近代以降も踏襲され、1940年代には道路として利用されていたことが国土地理院所管の衛星写真から確認でき、コンクリート製の排水溝も実際に確認できた。



25K 区東側全景(南から)

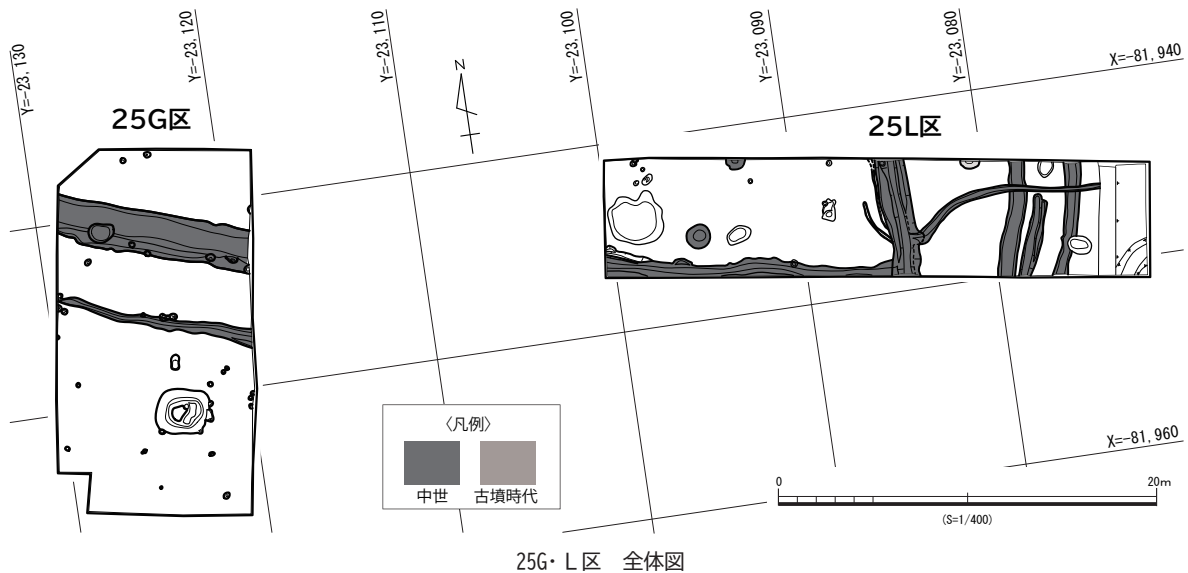


25C・D・J・K 区全体図

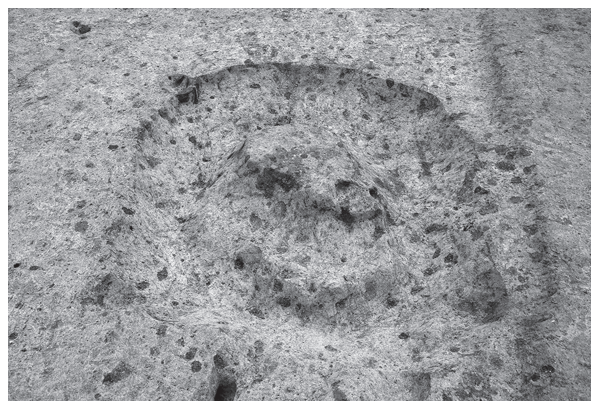
25G区 25G区は柱穴等の分布密度が低いエリアで、東西方向の溝2条、井戸1基、周溝遺構1基などが検出された。東西方向の溝は中世のもので、後述する25L区で検出された溝につながる可能性が高い。井戸は溝と重複する位置で検出されており、山茶碗が出土している。周溝遺構は平面が隅丸方形のもので、一辺2.5m前後の小規模のものである。遺物が出土しなかったため時期不明であるが、類例として24Cb区で検出された円形周溝遺構(中世)があり、25G区近辺の調査事例を踏まえても中世以降のものである可能性が高い。

25L区 25L区では中世の溝と井戸が確認されたほか、古墳時代の井戸1基が確認された。ただし、山茶碗の破片が多少出土するものの、いずれの遺構も遺物が乏しく、時期比定の決め手に欠ける。25G区同様、柱穴等の分布密度が低く、土坑も浅いものが多い。

南北方向の溝のうち、調査区中央で検出された溝には東西方向の溝が接続する。そのうち、西に延びる溝は25G区で検出された溝に続く可能性が高い。土層観察から、東西方向の溝が先に埋まり、最終的には南北方向の溝のみが機能した先後関係が認められる。調査区東側で検出された南北方向の溝は、25K区東側で検出された溝につながる可能性が高い。
(中里伸明)



25G・L区 全体図



25G区 周溝遺構(東から)

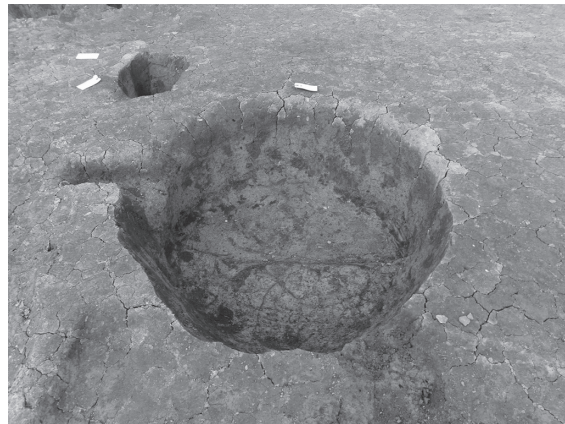
25E区・ 25E区は昨年度24Ka区の南側に接し、25F区は25E区の南側に位置する。両調査区で検出された主な遺構は古墳時代前半、奈良時代、中世および近世である。古墳時代の遺構としては25E区で竪穴建物1棟、井戸1基および周溝遺構1基を検出した。25F区では昨年度の24E区から伸びる東西方向の溝1条を検出し、土師器類が比較的多く出土した。周溝遺構は最大幅1.8mの溝が方形に巡ると推定される。奈良時代の遺構はE区で竪穴状遺構5棟、掘立柱建物3棟、井戸1基を検出した。竪穴状遺構は検出面では浅く、遺存状況は悪い。遺物は須恵器が少量出土した。掘立柱建物は2×3間の総柱で南北方向のもの2棟、東西方向のもの1棟である。柱穴より須恵器杯蓋が出土した。井戸は直径約1.6m、深さ約1mである。中世の遺構としては25E区で南北方向の溝5条、F区で南北方向の溝1条、井戸2基が検出された。近世の遺構としては25F区で東西方向の溝6条、南北方向の溝2条を検出した。近世の陶磁器類が少量出土した。



25E区遺構図



掘立柱建物(奈良時代)



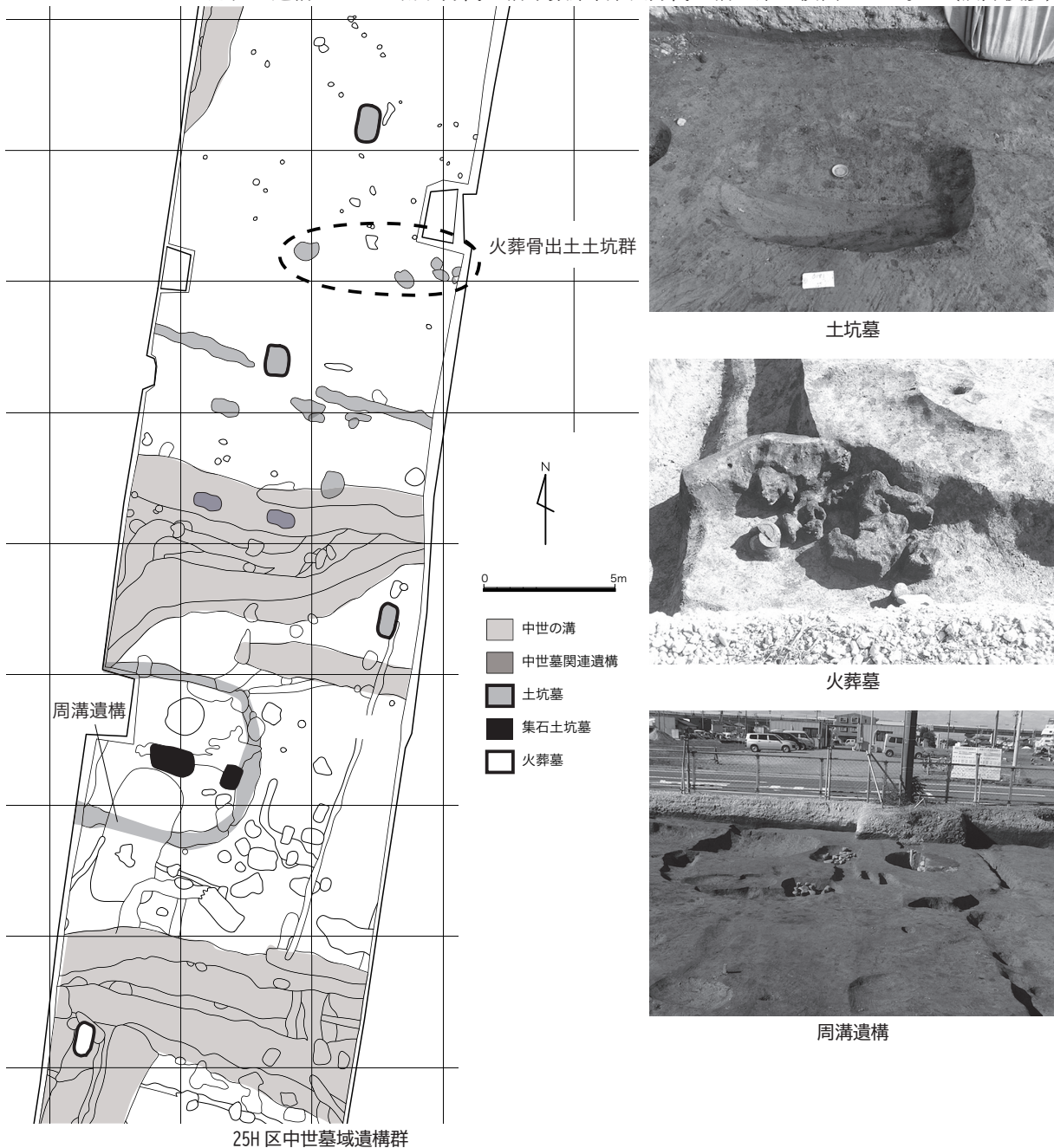
井戸(奈良時代)



25E区調査区全景(東より)

25Ha 区・ 25Ha・Hb 区では中世および近世の遺構が検出された。

25Hb 区 中世の遺構としては溝と中世墓および中世墓関係の遺構が確認された。東西方向の溝三十数条と南北方向の溝二十数条が検出された。中世墓の遺構として土坑墓3基、集石土坑墓2基、火葬墓1基が確認された。土坑墓は長軸が南北方向をとり、3基が離れて位置する。集石土坑墓は2基が東西方向に並ぶ。小形のものから骨片が出土した。火葬墓は中世溝の掘り方を利用しており、骨片、焼土、炭化物と古瀬戸陶器が出土した。また、骨片、焼土、炭化物を含む埋土の小土坑5基が集中して検出された。火葬に伴うものと推定される。集石土坑墓2基の周囲に周溝遺構が検出された。溝が囲む範囲の直径は約7mで、埋土より骨片、焼土が検出された。その他、中世墓に関連する遺構が検出されている。直線的に並び、約2mほどの途絶部分がある溝1条が検出された。途絶部分は通路的な機能があると推定される。溝に近接して同方向に並ぶ、柱穴の可能性のあるやや大型の土坑3基が検出された。また、特殊な平面形で根石が複数ある土坑が溝に近接して3基検出された。近世の遺構としては南北方向の溝十数条、東西方向の溝1条が検出された。（酒井俊彦）



- 調査の概要** Hc区では中世の井戸1基と近世の溝などが確認された。
- 2 5 H c 区** 井戸(0444SE)は素掘りの井戸で、深さは地表面から約1.5mであった。井戸の中ほどで灰褐色粘土が水平に堆積しているところがあり、上下で2時期で使用していたと推測する。上層から東濃型山茶碗、下層からは尾張型小皿が出土した。溝0440SD・0401SDは南北方向に延びており、それぞれ近世の陶器が出土した。
- 2 5 I 区** I区は調査区を西からIa・Ib・Ic・Id・Ieと計5区に分けて調査を行い、主に溝と土坑が確認された。南北方向に延びている溝は7条が確認され、中世後半～近世と推測される。Id区では、古墳と竪穴建物跡が確認された。
- 2 5 M 区** M区は調査区を西からMa・Mbの2つの調査区に分けた。
- Ma区では、主に掘立柱建物跡、中世の井戸2基、溝や近世の溝が確認されている。
- 掘立柱建物跡は、調査区の北東側で確認され一部調査区外に広がっていたが、推定で1間×2間と推測される。近くには素掘りの井戸0004SEが確認され、三筋壺が出土したことから12世紀に属すると思われる。溝は合計10条以上が確認され、いずれも深さは約20～40cmであった。このうち0085SDは尾張型山茶碗第5型式、0093SDは尾張型山茶碗第5型式、0297SDは尾張型山茶碗第3型式が出土しているため、中世の溝と考えられる。また0033SDの下層には礫が敷き詰められており、石材はほとんどが地山由来の濃飛流紋岩の円礫であった。道路遺構の名残の可能性はある。
- Mb区では溝、掘立柱建物跡、土坑、井戸が確認された。
- 溝は、Ma区から続く東西方向に延びる4条が確認された。掘立柱建物跡は、調査区中央で確認され、3間×1間であった。土坑は南側の地形から一段低くなった部分で確認され、遺構の平面プランの多くは隅丸方形であった。このうち、土坑340SKからは灰釉陶器瓶が出土しており、古代に属すると思われる。井戸0373SEは調査区北東側にあり、青山神明遺跡では数が少ない木製側式の井戸であった。この井戸は、各面に1枚板が使用されている。また、板を安定させるように下の部分を鋭角に削る加工がなされていた。また板にほぞ加工があり転用材と思われる。
- 2 5 N 区** N区は中世の溝や、近世末～近現代にかけての道路が見つかった。
- 溝0001SDは、南北方向に延びており古瀬戸盤類が出土した。この溝に平行する形で近世から近代と思われる道路遺構0003SFも延びている。また、道路遺構の両脇には側溝と思われる溝がある。井戸0015SEは調査区の南西側で確認された。近世の水田遺構によって大部分が削平されており、下層の一部のみが残存していた。遺物は尾張型山茶碗第5型式や渥美窯産の甕片が出土している。
- 2 5 O 区** O区は中世～近世の溝が3条、柵列が2列、中世の土坑墓が確認されている。
- 溝は調査区東側で東西方向に延びており、調査区西側で南北方向に屈曲する。断面を精査した結果、2条の溝が重複していることが確認された。遺物は古瀬戸四耳壺が出土しており、中世後期に属すると思われる。柵列は調査区北東側で南北方向と東西方向の2列が確認された。東西方向の柵列の0002SPからは永楽通宝などの銅銭が出土しており、中世後期に属すると思われる。土坑墓は調査区南西側から検出された。深さは10cmと浅かったが古瀬戸四耳壺片などが出土した。
- 2 5 P 区** P区では、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物が確認された。

(梶田真由)

